

『二人の貴公子』における試合を見ないエミーリアはどんな意味をもつか

はじめに

二人の男に愛されてどちらか一方を選ばなければならない葛藤。なおその選択には片方の死が伴う。このような状況は現代を生きる我々には信じられない事だが、このテーマを扱ったのがウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の『二人の貴公子』(*The Two Noble Kinsmen*, 1634)¹である。ジョン・フレッチャー(John Fletcher, 1579-1625)との共作によるこの作品は、元来から37作品とされていたシェイクスピアの演劇に加わる新たな3つの作品の1つとして興味深いし、数多くの研究を生んでいるのが実情である。主人公はタイトルにあるように、パラモン(Palamon)とアーサイト(Arcite)の二人の男性であるが、ここではこの主人公の運命を決定する彼らの恋の相手エミーリア(Emilia)に注目してみたい。

エミーリアは主人公二人がささげる愛について選ぶことが出来ない。その理由は以下のような批評家たちがこうのべている。Laurie J. Shannon は“ Emilia’s combined dedication to women and to chastity makes the case for chastity as an associative form. This chastity opposes not only tyrannical or coercive marriage, but also tyranny in its plain political sense ”(662)とし、結婚相手の選択と政治的意味を結び付け、その背景に女性性の考えを提示している。そして Misha Teramura はもっと端的に特定の女性を挙げて“ The first astonishing showpiece of Emilia’s subjectivity, her memory of girlhood friendship with Flavina, is, not insignificantly, also about same-sex aesthetic collaboration in ornament and music ”(570)とし、エミーリアにとってのフラヴィーナという死んだ女性の思い出の重要性を述べている。さらにこの二人の関係を Richard Mallette は“ Emilia’s same sex erotic credentials are firmly established early on ”(32)と述べる一方、“ A salient feature of Emilia’s friendship with Flavina is her recollection of their equality and balance ”(32)という二人の関係の理想的状態を示している。

上の3人の批評家が述べるエミーリア自身に端を発する貞節さという女性性であれ、フラヴィーナという別の女性の存在であれ、エミーリアにとっては女性が重要であり、それゆえ自分に向けられている二人の男性からの愛を選ぶことが出来ない、という状況を生んでしまっている。仮に片方の愛を選ぶことが出来るのなら、決闘による片方の死という解決手段は生まれなかったかもしれない。二人の愛を選べないエミーリアは実際の決闘について以下のような態度をとる。

Theseus

She shall see deeds of honour in their kind,
Which sometime show well, pencilled. Nature now
Shall make and act the story, the belief
Both sealed with eye and ear. You must be present;
You are the victor's meed—the prize and garland
To crown the question's title.

Emilia Pardon me;

If I were there, I'd wink.

Theseus You must be there;

This trial is as 'twere i'th'night, and you
The only star to shine.

Emilia I am extinct. (5.3. 11-20)

つまり、実際に起きている戦いを見ようとしない。片方の死が生じる戦いを辛いから見ない、とももちろん考えられる。しかし、この現実を見ないエミーリアの態度には作品全体のテーマに関わる意味が隠されているように思える。本稿では実際の戦いを見ないエミーリアの態度がどんな意味につながるのかを明らかにしたい。

1. 女性の慈悲の不完全性

作品中では女性が示す優しさは良い結果を生むとは言えない。いわば女性の慈悲の不完全性が示されている。二人の男性に愛されるエミーリアの取る態度というのは、“ I had rather both, / So neither for my sake should fall untimely ”(4.2.68-9)というものであり、両方を愛したいという態度は、両方の男性を愛していない、という事に繋がる。エミーリアの示す二人の男性への命の心配は、結果的に決闘による片方の死を生じさせる。公爵テーセウスは、エミーリアを得ようとして争うパラモンとアーサイトに対して法の下に二人の死を宣告するわけだが、この措置に対してエミーリアがテーセウスにお願いするのは以下のような事である。

Emilia

O, Duke Theseus,
The goodly mothers that have groaned for these,
And all the longing maids that ever loved,
If your vow stand, shall curse me and my beauty,
And in their funeral songs for these two cousins
Despise my cruelty, and cry woe worth me,
Till I am nothing but the scorn of women.
For heaven's sake, save their lives and banish'em.

Theseus

On what conditions?

Emilia Swear 'em never more
To make me their contention, or to know me,
To tread upon thy dukedom, and to be,
Wherever they shall travel, ever strangers
To one another. (3. 6. 244-56)

二人を追放にして自分を愛さずにさせるというエミーリアの願いは、先ほど示した出来れば二人を愛したい、という実は両方とも愛していないという態度に通じるものである。エミーリアの示す二人の男性への慈悲は、テーセウスのとる法による二人の死よりはましかもしれないが、結局決闘による片方の男性の死を生む、という慈悲の不完全性が示されていると言える。

仮に片方の男性に対して愛情をはっきりとエミーリアが示していたなら状況はどうなっていただろうか。テーセウスがアーサイトとパラモン両方の死を法により命じたのは、二人が生き永らえ、愛の苦しみを感じながら殺しあう。そして毎日エミーリアをめぐって人前で剣を振るって戦うから、というある意味慈悲による二人の死の宣告である²。エミーリアが片方の男性を選べるならば、両方の男性の死は生まれない、というテーセウスの判断も無きにしも非ずではないだろうか。

Madelon Lief は『二人の貴公子』全体に当てはまる特徴を“ Unlike Elizabethan

realism, based on the imitation of ideal or decorous patterns of behavior, the new realism of Fletcherian tragicomedy acknowledges — indeed underscores — inconsistencies, discontinuities, and failures of perception ”(410)と述べているが、エミーリアの片方の男性を選べない態度は Lief の述べる「認識の失敗」に通じる。二人とも愛していないとエミーリアが告げる場合には、テーセウスの判断の通り二人の男性の死が生じるのは当然と思える。しかし、二人を愛したいという認識の間違いが、二人とも愛していない、という隠れた意味を生むことになり、エミーリアの示す慈悲が結局、死を起こさせてしまう。最善の解決とは片方の男性をエミーリアが選ぶことができる、というものではないだろうか。しかし、これはエミーリアがとった態度ではなく、結局テーセウスの命じる決闘による片方の死という状況を生む。エミーリアの慈悲の不完全性は明らかである。エミーリアの認識と結果の不一致が見られる。

そしてもう一人女性の慈悲の満たされない不完全性を表しているのは、牢番の娘である。アーサイトとパラモンによる恋の争いの結果、アーサイトは国を追放、そしてパラモンは牢屋に入れられるという処分を受ける³。このパラモンに恋心を抱くようになるのが、牢番の娘である。パラモンへの恋心によって牢番である父親や自身の命が危うくなるのも気にせず、牢番の娘はパラモンを牢屋から逃してしまう。パラモンと一緒にするという期待によってとった行動であるが、パラモンと一緒にすることは出来ず、娘は気がふれてしまう⁴。わけのわからない事を言い続ける牢番の娘に対して、医者や彼女の求愛者が取った態度とはどのようなものであろうか。以下の場面を引用してみたいと思う。

Wooer She's eighteen.

Doctor She may be,

But that's all one; 'tis nothing to our purpose.

Whate'er her father says, if you perceive

Her mood inclining that way that I spoke of,

Videlicet, the way of flesh—you have me?

Wooer

Yes, very well, sir.

Doctor Please her appetite,

And do it home; it cures her, ipso facto,
The melancholy humour that infects her.

Wooer

I am of your mind, doctor. (5. 2. 32-40)

父親が娘を心配している状況で、医者が考えた治療法というのは、求愛者がパラモンのふりをして牢番の娘と性行為を行え、そうすれば病気は治る、というトンでもないものである。この嘘による性行為は強姦とも言われても仕方ないものであり、牢番の娘の尊厳は全く無視されている。娘が取ったパラモンの脱獄の手伝いという慈悲は、強姦という残酷な仕打ちの提案を引き起こす。慈悲が正反対の結果を招いているのが分かるであろう。そもそも恋の期待によって脱獄の手伝いを行った後、狂気に陥るといっただけでも、慈悲とは似つかわしくないマイナスの結果を招いており、満たされることのない慈悲、慈悲に対しての当然の見返りを享受していないと言える。

Peter C. Herman は“ Shakespeare frequently uses subplots to comment on the main plot ”(12)と述べる一方、“ Similarly, the Jailer’s Daughter’s love-induced insanity mirrors the insane love of Palamon and Arcite for Emilia ”(12)と説明している。この意見を発展させれば、パラモンのエミーリアへの恋の狂気は、牢番の娘に対しての求愛者の強姦による治療という狂気の鏡に映し出されたものである。狂気は牢番の娘による恋の狂気のみならず、この娘の治療法に対しても当てはめられるものであり、ハーマンの述べるように本筋の鏡になっている。

パラモンとの失恋によって狂気に陥った牢番の娘であるが、パラモン自身については何かいう事が出来ないだろうか。それはパラモンの不名誉にもつながる。パラモン自身の行動による一人の娘の狂気の治療法は、パラモンのふりをした男性によって娘を強姦するというものである。これは、パラモンが原因の残酷な仕打ちであり、パラモンの不名誉にもつながる。脱獄を手助けした牢番の娘の慈悲は、自身の狂気、それを治すための治療法の狂気、そして娘が愛したパラモンの不名誉さえも引き起こす、慈悲とは反対の望ましくない仕打ちを受ける。満たされない慈悲は明らかである。

この節では、二人の男性両方に示す愛が望ましくない結果を生んでしまうエミーリアを説明し、慈悲の不完全性および認識と結果の不一致を示した。そしてもう一人の女性登場人物牢番の娘を取り上げ、彼女の示す慈悲もやはり、それとは正反対の望ま

しくない結果を生み、慈悲は満たされないという事を示した。この作品では、慈悲が望ましくない結果を生み満たされる事はない、という特徴がある。

2. アーサイトとパラモンの比較

エミーリアをかけて争う二人の主人公はアーサイトとパラモンである。最初にエミーリアを目にするのはパラモンであり、最初に恋に落ちるのもパラモンである。パラモンに次いでエミーリアを目にして恋に落ちるのがアーサイトであるが、この最初と二番目の目撃というのも恋の争いの種となっている。

タイトルは『二人の貴公子』であり、二人ともに紳士である事が推測できる。実際彼らの態度には武人らしい礼儀正しさを見出せる。しかし、恋敵となった二人を比較してみると、二人の資質の差が表れてくる。最初にエミーリアを目にしたパラモンは“ If thou lov'st her / Or entertain'st a hope to blast my wishes, / Thou art a traitor, Arcite ” (2. 2. 171-3)とかなり強い言葉でアーサイトを非難する。対するアーサイトは“ Let me deal coldly with you. / Am not I / Part of your blood, part of your soul? ” (2. 2. 186-7)と冷静さを失っていない。あくまで話し合いを求めているアーサイトである。恋敵として争うのは避けられない事であるが、パラモンの言うようにアーサイトがエミーリアを自分のものにしようとするのは不正である、という意見は子供じみたものではないだろうか。互いを認めつつ争うという姿勢が欠如している。アーサイトが述べる相手の存在価値を認める姿勢が、パラモンには欠如している。先に述べたアーサイトによる自分はパラモンの血と魂の一部という発言は、相手の存在と自分の存在を公平に、そして同じ立場で考えている証拠である。恋敵となった今でも、アーサイトのパラモンへの態度はこのようなものである。さらにアーサイトとパラモンの資質の差がわかる会話を引用してみたいと思う。

Arcite Because another
First sees the enemy, shall I stand still
And let mine honour down, and never charge?
Palamon
Yes, if he be but one.

Arcite But say that one
 Had rather combat me?

Palamon Let that one say so,
 And use thy freedom; else if thou pursuest her,
 Be as that cursèd man that hates his country,
 A branded villain.

Arcite You are mad.

Palamon I must be,
 Till thou art worthy, Arcite—it concerns me;
 And in this madness if I hazard thee
 And take thy life, I deal but truly.

Arcite Fie, sir,
 You play the child extremely. I will love her,
 I must, I ought to do so, and I dare,
 And all this justly. (2. 2. 195-208)

最初にエミーリアを見たのがパラモンだからといって私がエミーリアを愛してはならないという理屈は成り立たない、と説明するのに出陣の際の自己の態度を比喻として使っているアーサイトである⁵。敵を見つけたのが別の男であっても、自分が後から攻撃をしかける、つまり後から恋するのはまともな事である、と述べるアーサイト。アーサイトを悪党呼ばわりしてまでも自分は正しいと宣言するパラモンは、アーサイトの言うように子供じみていると考えるのが妥当である。冷静さを完全に失っているパラモンと言える。

恋に対して冷静さを失っているパラモン、そして子供じみた様子を示すパラモンを説明するのに Sujata Iyengar は“ Palamon’s “ brown ” skin associates him with heat and thus explains his surplus of boys: according to Renaissance theories of sexual reproduction, male children were conceived at a higher temperature than female ” (97) と興味深い意見を述べているが、この言葉もパラモンの資質を説明するのに適切と言える。

ここまでアーサイトとパラモンの恋に対しての二人の態度という観点から比較をし

てきたが、エミーリアを獲得するために行われた公式の決闘とその結果においても二人の対比は明らかである。勝った方がエミーリアを手に入れ、負けた方が死ななければならない、という公式の試合である。この戦いにおいて勝利を得たのはアーサイトであり、アーサイトがエミーリアを手に入れるはずであったが、勝利を得た直後、落馬によって命を落としてしまう。その結果、負けたパラモンがエミーリアを手に入れる事になる。この試合の結果について名誉という観点でアーサイトとパラモンの対比が見られるのではないかと考える。試合に負けたパラモンは一緒に戦った仲間の騎士に以下のような言葉をかける。

Palamon

We come towards the gods
Young and unwrapped, not halting under crimes
Many and stale—that sure shall please the gods
Sooner than such, to give us nectar with'em,
For we are more clear spirits. [...] (5. 4. 9-13)

このパラモンの言葉は試合に負けはしたが、自身の死に対して悲しみを表してはおらず、神々と若くして来世で出会う事を喜んでさえいるような発言である。仲間の騎士にも“ a grain of honour / They not o'erweigh us ” (5. 4. 18-9)と勝負に負けはしたが、名誉においては引け目を感じる必要はないとパラモンに答えている。パラモンの負けた試合には神や来世、そして戦った仲間の後悔がない様子など、死に対しての名誉が伴っている。いわば死すべき人間の名誉が表現されている。

しかし、この死に対しての名誉は、試合に勝っておきながら落馬によって命を落としたアーサイトに移ってしまう。パラモンは友人の死を嘆くが、結果的に恋を獲得する。アーサイトの死を知ったテーセウスの言葉を引用してみる。

Theseus

Never Fortune

Did play a subtler game: the conquered triumphs,
The victor has the loss. Yet in the passage
The gods have been most equal. Palamon,

Your kinsman hath confessed the right o'th'lady
Did lie in you, for you first saw her and
Even then proclaimed your fancy. He restored her
As your stol'n jewel, and desired your spirit
To send him hence forgiven. [...] (5. 4. 112-20)

アーサイトの死は神々の裁量により公平なものであったと述べるテーセウスである。つまり、パラモンが述べていた、最初にエミーリアを目撃したのが自分であったからエミーリアは自分のものである、という屁理屈を認めるだけでなく、その屁理屈に対して抗ったアーサイトがパラモンから赦しを得て天に召されたのだ、というテーセウスの説明がなされている。この点で名誉は死者となったアーサイトにあると言えないだろうか。先に述べていたパラモンの自身の死に対する喜びと名誉の言葉は、自分が生き残る事で否定され、死者となったアーサイトはパラモンの述べていた屁理屈に対して、自分が赦しを得るために死んだ、という気高い死に方をした人物となる。死に対しての名誉はパラモンからアーサイトに完全に移ったのである。Andrew Hickman は『二人の貴公子』のアーサイトとパラモンについて“ One of the methods by which the audience is reminded of its obligation to choose is to confront it with contrasts ”(145)と述べているが、アーサイトとパラモンは、恋に対しての態度、つまりアーサイトの示す冷静さと自分を失ったパラモンの道理に合わない熱っぽさのみならず、名誉においても、名誉を生きて失うパラモンと名誉を死と共に得るアーサイトという点でも対比が見られる。ここまでの説明でアーサイトとパラモンの対比は明らかになったであろう。アーサイトはパラモンよりもエミーリアにとって相応しい人物となるはずの、より優れた登場人物だったのである。

結論

第1節ではエミーリアがアーサイトとパラモンの両方を愛するという態度によって、実は両方を救うことにはならず、優しさが満たされる事はないと証明した。また牢番の娘によるパラモンの脱獄の手助けという優しさも、治療という名の騙しのセックスという乱暴に結びついてしまい、彼女の示す慈悲は満たされることはないと証明した。

そして第2節ではアーサイトとパラモンの比較を行い、パラモンの恋に対する態度の極端さとアーサイトの名誉の死を示して、パラモンよりもアーサイトの方がエミーリアに相応しい人物であると証明した。この2節で共通するのは、慈悲がいい結果をもたらさない事も、より理想の人物であるアーサイトに示される名誉という気高さも、注がれる関心が必ずしもプラスの効果を生むものではない、という事である。

命をかけた試合の前にパラモンは“ This I shall never do again ”(5. 1. 32)とアーサイトを抱き寄せ、答えるアーサイトも“ One farewell ”(5. 1. 32)と二度目のさよならはない事を確かめ合う。しかし、実際は落馬によってまさに命尽きる寸前にアーサイトは“ Take Emilia, / And with her all the world’s joy. Reach thy hand— / Farewell ”(5. 4. 90-2)と二度目のさよならをしている。このないはずの二度目のさよならによってパラモンとアーサイトが友情の極みに達すると同時に片方の死によって友情を失うという矛盾が生じる。また同時に死の喪失と愛の獲得という矛盾も生じる。矛盾が結末で重要な要素になっている⁶。

本稿の間は生死をかけたアーサイトとパラモンの試合をエミーリアが見ないことが何につながるかを明らかにする事であった。死を伴う事柄に対して目を背けるというのは、最大の関心を払いながらも無視するといういわば矛盾の状態である。いいかえれば現実の拒否である。現実がありながらも無視しようとする態度である。現実の拒否は存在しない事、実現しない事への理想化とつながる。試合を見ないのは両者が勝者となる起こりえない事への期待である。そしてエミーリアはフラヴィーナという既に死んだ人物に対して理想を抱いている。アーサイトとパラモンを比較してより理想の人物であったのは、アーサイトであるがパラモンとの友情の極みの中で死去する事で、アーサイトは名誉を保ちながらもエミーリアの理想の夫とはなれない。フラヴィーナもアーサイトも死去した人物として理想ではあるが存在せず、現実の愛をエミーリアに注ぐことは不可能になったのである。先ほど示した、第1節、第2節の結論で導かれた注ぐ関心が必ずしもプラスの効果を生まないという事実と、存在しないものへの関心が実際の愛の状態には結びつかないという事実と、重なってくるのではないだろうか。実際の試合を見ないエミーリアによる関心がありながらも無視する態度の矛盾は、フラヴィーナのみならずアーサイトという理想の人物の死によって得ながらも失うという矛盾につながる。試合を見ない現実の拒否は、死者を理想とし、理想が実現しないということにつながるのである。これが本稿で出した結論である。

理想とは実際の事柄や人物に対して抱く場合もあるが、既存の状態にたいしてそれを否定し、こうあったらいいと願う非現実を元としている事が普通ではないだろうか。理想に近づけばさらにその理想が遠のき、いつまでたってもその理想には辿りつかない。これが人間の成長、社会の成長であり、実現しない理想こそ人間の運命であると考えずにはいられない筆者である。

註

1. 以下『二人の貴公子』からの引用は、William Shakespeare, *The Two Noble Kinsmen*, Oxford UP, 2008 年の版に拠る。
2. 剣は人を殺すこともあれば、人を死から守る事もある。また相手を傷つける事もあれば、自分の名誉を守る事もある。剣はこのように二重の意味があり、アーサイトとパラモンの場合の剣にも、憎しみと名誉の両方の意味が隠されている。
3. このアーサイトの追放、パラモンの投獄という罰には一切の説明がなされておらず、単なる偶然に思われるが、この偶然が結末のアーサイトの死の偶然性にも関連づけられうる。
4. 牢番の娘の恋が成就しない事には、もちろん身分の差も関係している。Douglas Bruster は彼女の特異性について“ Her role in the play is defined in terms of her difference from other characters—social and psychological as well as linguistic ” (279)と説明している。
5. 恋と攻撃を関連付ける事は中世以来、度々行われてきた事である。例えば13世紀のフランス文学における『薔薇物語』(*Roman de la Rose*)で作者ギョーム・ド・ロリス (Guillaume de Lorris) とジャン・ド・マン(Jean de Meun)は薔薇を女性とし、恋と攻撃を寓意的に描いている。ただし、こうした比喩は現代の潮流では女性蔑視と考えられる傾向にあり、実際『薔薇物語』もこうした解釈により非難を受けた事もある。『薔薇物語』は女性論争の先駆けとなる作品である。
6. この矛盾は結果的に妥協の解決へと変化する。すなわちエミーリアはアーサイトより劣るパラモンを夫とし、牢番の娘は実際に愛したパラモンを夫にすることは出来ないが、別の男性との結婚という解決を見る事になる。偶然からの矛盾は予想しづらいが、矛盾から妥協というのは予想しやすい事だと思う。

引用・参考文献

- Bruster, Douglas. "The Jailer's Daughter and the Politics of Madwomen's Language." *Shakespeare Quarterly*, Autumn, 1995, Vol. 46, No. 3 (Autumn, 1995), <https://www.jstor.org/stable/2871119>, pp. 277-300.
- Craik, Katharine A. . "Shakespeare's 'A Lover's Complaint' and Early Modern Criminal Confession." *Shakespeare Quarterly*, Winter, 2002, Vol. 53, No. 4 (Winter, 2002), <https://www.jstor.org/stable/3844236>, pp. 437-59.
- Dessen, Alan C. . "Of an Age But Not For All Time? Staging Shakespeare's Contemporaries at the Swan." *Shakespeare Bulletin*, Summer 2015, Vol. 33, No. 2 (Summer 2015), <https://www.jstor.org/stable/10.2307/26355111>, pp. 319-31.
- Herman, Peter C. . "'Is This Winning?': Prince Henry's Death and the Problem of Chivalry in *The Two Noble Kinsmen*." *South Atlantic Review*, Winter, 1997, Vol. 62, No. 1 (Winter, 1997), <https://www.jstor.org/stable/3201195>, pp. 1-31.
- Hickman, Andrew. "'Bonduca's' Two Ignoble Armies and 'The Two Noble Kinsmen'." *Medieval & Renaissance Drama in England*, 1989, Vol. 4 (1989), <https://www.jstor.org/stable/24322297>, pp. 143-71.
- Iyengar, Sujata. "Moorish Dancing in 'The Two Noble Kinsmen'." *Medieval & Renaissance Drama in England*, 2007, Vol. 20 (2007), <https://www.jstor.org/stable/24323014>, pp. 85-107.
- Jacobs, Kathryn. "Ben Jonson on Shakespeare's Chaucer." *The Chaucer Review*, Vol. 50, No. 1-2 (2015), <https://www.jstor.org/stable/10.5325/chaucerrev.50.1-2.0198>, pp. 198-215.
- Lief, Madelon. "Linguistic Subversion and the Artifice of Rhetoric in *The Two Noble Kinsmen*." *Shakespeare Quarterly*, Winter, 1987, Vol. 38, No. 4 (Winter, 1987), <https://www.jstor.org/stable/2870422>, pp. 405-25.
- Mallette, Richard. "Same-Sex Erotic Friendship in 'The Two Noble Kinsmen'." *Renaissance Drama*, 1995, New Series, Vol. 26, Explorations in Renaissance Drama (1995), <https://www.jstor.org/stable/41917317>, pp. 29-52.
- Orgel, Stephen. "The Desire and Pursuit of the Whole." *Shakespeare Quarterly*, Autumn,

2007, Vol. 58, No. 3, Special Issue: The Complete Shakespeare (Autumn, 2007),
<https://www.jstor.org/stable/4624992>, pp. 290-310.

Shakespeare, William. *The Two Noble Kinsmen*, Oxford UP, 2008.

Shannon, Laurie J. . “ Emilia's Argument: Friendship and 'Human Title' in "The Two Noble Kinsmen". ” *ELH* , Fall, 1997, Vol. 64, No. 3 (Fall, 1997),
<https://www.jstor.org/stable/30030235>, pp. 657-82.

Teramura, Misha. “ The Anxiety of Auctoritas: Chaucer and "The Two Noble Kinsmen". ”
Shakespeare Quarterly , Winter 2012, Vol. 63, No. 4 (Winter 2012),
<https://www.jstor.org/stable/41819768>, pp. 544-76.